

ジェンガ

ジ
エ
ン
ガ

登場人物

青年

町の住人達

青年が、階段を上っている。

延々と続く階段を上り続けている。

青年「階段を上ってる。どこまでも続く階段を上ってる。大勢の人が列をなして、階段を上ってる。階段は高くそびえる塔に、巻きつくようにして続いている。みんな手には『何か』を持ってる。カバンとか、風呂敷とか、柱とか、おもちゃ、窓枠、写真、そんで俺は、ボロボロの日記。たまに、日記を開く。この日記は俺の日記じゃない。俺の妹の日記だ。全部ひらがなで、多分クレヨンかなんかで書いてある。たまに読めない字がある。俺には妹がいたのか。もう、顔も思い出せない。ただ、この日記は大切なものだ。どこから来たのか、覚えてない。自分の名前さえ、思い出せない。長い時間、上り続けていくうちに、いろんなモノを忘れてしまった」

青年、階段を上り続ける。

やがて、頂上が見えてくる。

青年「何日も、何日も、上り続け、やがて、塔の頂上が、見えてきた。塔の先端に巨大な頂上が見えてきた。階段はその一部に入り込むようになって、しばらく、暗い階段を上っていくと、先に光が見えた。そして、たどり着いた」

青年、光を遮るように両手で目を覆う。
しばらくして、そっと、両手を下ろす。

青年「光が降り注ぎ、どこまでも続く青空を目にした。頂上には、立派な街が、広がっていた」

賑やかな口調の案内人の男が現れる。

案内人「はーはーい、皆さん、お疲れ様でしたー！！！！」

青年「疲れ切った俺たちを迎えたのはやたらと元気な声の案内人だった」

案内人「皆さん、ホント、大変だったでしょう？ 長い長い階段はこのままずっと終わらないんじゃないのかって思いますよね。僕もそう思いましたー。でも、諦めずに上

りました！ 自分にはそれしかないんだって！ 休まず一生懸命上ったんです！
そして、皆さんと同じように、この街にたどり着いたんです！」

青年 「（あたりを見回して）街が広がっていた。大きな目抜き通りにはいくつもの商店が立ち並び、その向こうには高いビル群が聳え立っている。そして、多くの人、人、人」

案内人 「どうですか？ ここがこれから皆さんが暮らす街です！すごいでしょ！皆で一生懸命作ったんですよ！けど、まだまだ建設中なんです。ほら、あそこ！見てください！」

案内人、遠くを指さす。

青年、そちらを見る。

青年 「案内人が指をさす。そこには、塔が建っていた」

案内人 「あそこからまた上に上って街を作るんです。この街もそれなりに大きいんですけど、皆さんみたいに下から上ってくる人が後を絶たないので、住むところがたりなくなりそうですね。だから、みんなで新しい街を作ろうとしてるんです！あ、皆さんが持ってきた荷物はここで回収しますね。大切な街の材料に使うので！」

青年 「列になって、荷物を置いていく。山が出来た。大きな荷物の山。ぬいぐるみ、椅子、カーテン、ブロック、巨大な鉄骨、そういうものが積まれてる。街の人が、山の中から荷物を塔の方向へと運び出している。荷物を手放す時、みんな少し、寂しそうな顔をした。けれど、前の人が荷物を置くからそれに倣って、荷物を置いていく。日記、どうしようか。手放したくないと思った。この日記は大事なものだ。でも、置いていかないといけないらしい。だから、ページを破いた。こっそり、見られないように。青いクレヨンで『お兄ちゃん大嫌い』と大きな字で書かれたページを破いて、ポケットに入れて、日記は荷物の山に放り投げた。いくつもの荷物が重なっていく」

案内人 「では皆さん！お疲れ様でした！皆さんの住む場所はどう用意されていますので、新しい家でゆっくり休んでください！そして明日からさっそく、新しい街づくりに参加してくださいね！」

青年 「簡単な地図が渡されて、新しい家の場所が伝えられた。同じ部屋になったやつは、俺と同じぐらいの年の男だった。食事を摂り、風呂に入り、温かなベッドで眠った。疲れた。すごく疲れた。もう、寝よう」

青年、大きな欠伸をして、眠る。

市長、登場。

大きな声で、

市長「皆さん、おはようございます」

青年「広場には俺と一緒に上ってきた連中が集まっていて、偉そうな態度のおっさんが大声であいさつをした」

市長「私は、この街の市長です。どうぞよろしく。えー、私の名前は、ジェンガ。ジェンガというのはこの街の名前です。そしてこの名前は皆さんの名前でもあります。皆さんは長く続く階段を上り、このジェンガにやってきました。私も、皆さんと同様に、あの階段を上りました。そして、皆さんと同じく、私も、忘れてしまいました。何もかも。何もかもをです。私がこの街に着いた時に手にしていたのは、なんだったのか、今ではもう思い出すことが出来ません。それはもう、私の元にはありません。（塔を指さして）あの新しい街へと続く塔の一部となっています。気に病むようなことではありません。それは、大変、名誉なことなんです。自分の持ち物が街の礎になる。そして、その街に新しい人々が暮らす。我々はその目的を強く持って、使命に燃え日々を暮らしています。皆さんには是非ともその仕事の手伝いをしてもらいたい。どうか一丸となって、街を作ろうではありませんか！」

青年「軽快に、そして、いくらか元気よく）そんなわけで、塔を作ることが俺の仕事になった。例の荷物の山から、使えそうな物をひっぱり出して塔に運ぶ。そしてうまくと組み合わせて塔を作っていく。間近で見ると、本当にいろんなもので出来ていた。フライパンとか、凶鑑とか、ビニール袋とか電光掲示板、玉砂利、長靴、ひな人形。なんだかもう、ぐっちゃぐっちゃで、統一感なんてあったもんじゃない。俺たちが住んでる家や街の建物なんかも、大体同じようにいろんな材料でできてるんだから驚く。驚くけど、それで街が出来て、何にも問題がないなら、気にするようなこともない。ああ、あと、それと、俺の名前は、ジェンガになった。市長が言ってたように。名前がないから。忘れちゃったから」

青年、少し、寂しそうに、

青年「同じ部屋のあいつも、ジェンガだ。街の人間たちみんなが同じ名前。ジェンガという名前。同じ名前でも、うん。特に問題はない。問題あるのは・・・街とか名前のことじゃなくて、人の、方だ。この街には毎日新しい住民がやってくる。だから住むところが足りてない。俺は二人の相部屋だったけど、他の連中の話だと、四人とか五人とかで暮らしてるやつもいるらしい。早く手を動かして完成させなきゃいけない。あんまり残業はしたくないんだけど、早く作らないと、俺たちの部屋が三人部屋とかになっちゃう。だから仕事をする。毎日毎日遅くまで。そのうち、仕事をするのが生活そのものになっていく。起きて、仕事して、帰ってきて、寝て、起きて、仕事する。それ以外は、特にない。店とかやってる連中もいる、ビルで働いてるやつもいる。でも、みんな、やってることは一緒だ。塔の為、街の為だ。実際にやってる仕事は違っても

目的は一緒。働いて、働いて。いつも、仕事のことで頭がいっぱいで、何か思い出したり、悩んだり、考えたり、そんなことする暇もない。ああ、でも、たまに：」

青年、ポケットから日記の切れ端を取り出し、同室の男に見せる。

青年「これ、なんだと思う？ 思い出せないんだ。なんて書いてある？ 文字なのかな？

青い、字だ。読めなくてさ。読めたのかな？ 読めたから、持ってたのかな？ なんか、気が付いたらポケット入ってたさ、捨ててもいいかなと思ったんだけど、なんていうか、なんて言うかさ・・・」

同室の男「大切な物？」

青年 「ああ、そうそう、大切なんだと思う。お前、これ、読める？」

同室の男「いいや、読めないよ。でもきつと、大切なモノだったんだよ。昔」

青年 「でもさ、ここに来るとき、ほら、荷物、全部置いてこなきゃだろ？ だったら、俺の持ち物じゃない気がするんだよ。もし、俺のモノだとしたら、なんで持つてるんだ？」

同室の男「わかんないけど、最近、取り締まってるから隠しておいた方がいいよ。荷物持つてる人のこと。捕まっちゃうよ？」

青年 「なんで捕まえるんだよ？」

同室の男「ほら、最近また増えたでしょ？ 人。それで、だんだん管理しきれなくなってきた、荷物持ちっぱなしにしちゃう人が増えたんだよ。それで、荷物ずっともってると思い出しちゃうんだって、自分の名前とか、昔のこととか、そういうの。で、『帰りた』って言い始める。で、帰り始める」

青年 「どこに？」

同室の男「さあ？ でも、居なくなっちゃうみたい。居なくなれると働く人が少なくなっ
て困るから」

青年 「ふーっくん、じゃ、捨てちゃおうかな、思い出せないし」

同室の男「止めた方がいいよ。もし、何かの拍子に思い出したら、すぐ後悔するだろうから」

青年 「次の日の朝、同じ部屋のあいつは、居なくなってた。あいつの言ってた通り、最近ちらほらと、人が少なくなることがある。前はいなかった取締官？ そういう組織も出来た。制服着て街を歩いてる。市長が演説してるのを見た」

市長「もし、この中に、思い出を大切にしている人がいましたならば、すぐに忘れてください！！」

青年「市長がいくら叫んでも、思い出すやつらは減らなかった。取り締まりはどんどん厳しくなって、お互いにお互いのことを見張るようになった」

青年、大きく伸びをする。

青年 「(あたりを見ながら)・・・なんか、窮屈なんだよな」

声の高い男 「しょうがないだろ、そういう規則なんだから」

青年 「でも、さすがに三人は狭いよ」

口の曲がった男 「我慢しろよ、おれたちはまだましな方だぜ。10人部屋だってあるらしいからな」

声の高い男 「10人！それどこで寝るんだよ！」

青年 「10人でも3人でも一緒だよ。窮屈だし、暑いし・・・」

青年、紙切れで自分を扇ぐ。

声の高い男 「お前、なんだそれ？」

青年 「え？これ？ああ、お前これ読める？多分字だと思うんだけどさ」

曲がった男 「これ、お前のか？」

青年 「ああ、多分」

声の高い男、と口の曲がった男、突然、騒ぎ始める。

声の高い男 「誰かあああああ！！！！！！」

曲がった男 「誰か！誰か来てくれ！！」

青年 「突然、二人は叫んだ。叫びながら、俺を捕まえようとしてきた。おい！なにするんだよ！」

声の高い男 「お前、帰るつもりだろ！」

青年 「違うよ！！くそ離せよ！」

青年、組み付く二人を突き飛ばして、逃げる。

青年 「俺は逃げた。なんで逃げなきゃいけないのか分かんなかったけど、逃げた。振り返ると、制服のやつらが追っかけて来てた。待てだの、止まれだのと叫びながら、追いかけてくる。俺は夜の街を走った。住宅街を抜けて、線路を横切り、ビル街まで。しつこい、まだ追いかけてくる。あの感じだと、『これは俺のじゃないんですよ』とか言っても駄目なんだろうなあ。捕まったらどうなるんだろうなあ。参ったな。走って走って、走って。自分がどこを走ってるのかわからなくなって、疲れ切って、倒れそうになった時、いきなり横から引っ張られた！」

青年、何者かに引っ張られ、その場に倒れこむ。

同室の男「久しぶり」

青年「（顔を上げて）あいつだった。居なくなった、ジェンガ。お前、なんで？」

同室の男「一緒に来て」

青年「あいつはそう言うとき黙ったまま、街の中を進んだ。追ってくる奴らの気配はなかった」

青年、同室の男の後に続いて行く。

同室の男「ここだよ」

青年「荷物の山だった。積み上げられた荷物をかき分けて入っていく。よく見ると、人が入れそうなスペースがずっと続いている。そして、しばらく進むと、穴があった。暗い穴だ。先が見通せないのは夜のせいだけでじゃない」

同室の男「ここから帰れる」

青年「帰りたいと思っではない」

同室の男「でも、戻れないだろ？」

青年「言うとおりの。このこ戻っていったところで、きっと元の仕事は出来ないだろう。何をされるのかはわからない。けれど、演説をしていた市長の剣幕を考えると、きつとロクなことにはならない。帰ったのか？」

同室の男「帰ったよ」

青年「何があった？」

同室の男「そのうちわかる。じゃあ、僕はまた何人か連れてこないといけないから」

同室の男、去っていく。

青年「あいつはそう言うとき、街の方に向かっていった。なあ、ジェンガ！と、声を掛けてみた。けど、あいつは答えなかった。きつと、もうジャンがじゃないんだと思う。俺は、穴に入った。暗い中を壁伝いに進む。しばらくすると、明かりが見えた。階段だ。下に階段がずっと続いている。きつと、ジェンガを支える塔に巻きつくように続いているんだらう。点々と続く明かりが曲がって途中で途切れている。いろんなものが出てくる階段を、下りる。鉄パイプ、車のフレーム、植木鉢、学校の机、画面の割れたテレビ、醤油の瓶、傷ついた表札……。いろんなものを踏みしだきながら、階段を下りていく。黙って下りていく。どのくらい、下りたんだらうか。どのくらいの時間、下りているんだらうか。あいつは、この階段を下りてくるんだらうか」

青年、階段を下っていく。
ふと、何かに気が付く。

青年「声がした。でも、それは気のせいで、誰の声もしない。でも、声が出ている。頭の中で。お前、誰だ？この声、誰だ？俺は、ポケットの中から、あの紙切れを出した。『お兄ちゃん、大嫌い』それは、妹の字だ。青いクレヨンで描かれた、妹の字だ。（すごく小さな声で）俺は・・・俺は・・・」

青年、何かを思い出す。そして、勢いよく、

青年「俺は、階段を駆け下りていた。何段も何段も駆け下りた。時々出っ張っている何かにけつまずいて階段をころがった。けれど、止まることなく、下り続けた。頭の中に声が響く、いろんな声が響く。いろんな景色が浮かんで消えて、また浮かんだ。忘れてたこと、人、言葉が洪水になって大きな波みたいに、押し寄せてくる。波・・・」

青年、立ち止まる。

青年「思い出した。なんで、階段を上っていたのか。なんで、上り始めたのか。なんで、みんな、大切な何かを持って、階段を上っていたのか。そして、なんであんなところに新しく街を作っていたのか。俺の思い出が本当のことだとしたら、妹は・・・。光が見えた。階段の先に、光が見えた。帰りたい。けど、帰る場所はあるのだろうか？」

青年、当たりを見回す。

青年「街だ。街があった。俺は、街に踏み出し、そして、振り返った。そこには、塔があった。頂上が見えないほど高い、塔があった。何もかも忘れた彼らはまだ街を作っているのだろうか。ここにはもう、街があると言うのに。お兄ちゃんと呼ばれて、振り返る。ただいま」

終